

保育者養成における幼児期の生活と遊びの理解： 学生自身の遊びの体験を活かす授業のあり方

Understanding of Childhood Life and Play in the Early Childhood Educator Training Course: How to Utilize the Students' Own Play Experiences in Lessons

キーワード：幼児教育、遊び体験、幼児理解

村石 理恵子

MURAISHI Rieko

Abstract

The author studied what kind of lesson should be carried out in order to make students understand life and play in early childhood for the training of future early childhood educators. When the students of the training school looked back on the play experience of childhood, it turned out that “let’s pretend game” and “game of tag” were enjoyable. Furthermore, the “game of tag” was recommended as the most favorable play for early childhood. From this result, it can be suggested the necessity to conduct classes that are not biased toward technical guidance by utilizing their favorite feeling about exercise, and that can be understood the importance of originally autonomous and free characteristics of play itself while considering the generosity to those who are immature. And thus, it was found desirable to perform various subjects in an effective sequence by linking the experience of the students themselves and that of the children.

1 問題の所在と目的

子どもが生き生きと遊んでいる姿は、保育実践者にとって喜びである。遊びは「もてる感覚のすべてを使って空間や物、自然の事象や現象と自分との“生命現象が共振する関係”を身体化する」（青木2015）からである。幼稚園教育要領では「幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習である」（文部科学省2017）とされている。そして幼児期は非認知能力の育成においても重要な時期であるといわれ、注目されている（ヘックマン2015）。「子どもが夢中になって活動し、遊ぶ

姿と生活の中で心地よく過ごし、安心安定する姿とは表裏一体である」（野口2015）ことから、その生活と遊びが豊かであることが強く望まれる。

幼児が主体的に遊ぶことが大切だと言われながらも、現代は、空間がなく、時間がなく、仲間がいらないといういわゆる三間のないことが課題といわれている（窪ら2007）。「幼児の生活アンケート」^{注1}の中で、ここ20年間で幼児は平日、幼稚園保育所以外では母親と遊ぶことが増えて、きょうだいや友達と一緒に遊ぶ比率が減少していることが報告されており（ベネッセ教育総合研究所2015）、幼児が周囲の人々と共に主体的な遊びを十分に楽しむことが難しくなって

いる。

幼児期の生活全般における近年の変化をとらえ、幼児教育施設で前述のような現代の問題を補完することも期待される。その際、保育実践者の生育環境が、自然環境に恵まれた地域であったか、既に携帯コンピューターゲームがあったかは、実際の保育に大きな影響を与えらると思われる。保育実践者は自身の体験と異なっている、目の前の幼児の生活の現状を理解した上で、幼児期にふさわしい生活をつくっていかねばならない。その保育実践者を養成する立場として、どのような学修をすすめていけばよいか問われる。

保育者養成校に入学したばかりの学生に保育実践者像を尋ねると、園児の自分を励まし、一緒に遊んでくれた存在として記憶し、その先生に憧れて自分も保育実践者を志望したと動機を語る例が多い。さらにその具体像は、エプロンをし、ピアノを弾いて歌を歌い、一緒に遊ぶ明るい女性、と想像している傾向がある。これは、必ずしも自分の体験からだけでなく、一般的な保育実践者像に重ねている場合もあると思われる。こうしたイメージは、学生自身の保育実践者像にどのような影響を与えるのであろうか。学生の抱くイメージや学生自身の体験を適切に活かし、深く学んでいくためには、どのような授業を実施することが望ましいのか、授業のあり方を考える必要がある。

本研究では、保育者養成校の学生が自身の体験を振り返ることを通して、幼児期の遊びについての理解をし、学修に活かすにはどうしたらよいか、保育者養成の授業のあり方を検討することを目的とする。具体的には、幼児期の遊びの体験の調査項目について学生の振り返り調査を実施し、関連性を踏まえた授業につながるポイントを見出すことである。

II 方法

1. 対象

保育者養成校(短期大学児童教育学科)幼稚園教員免許2種取得予定 2年次学生 55名(実施日欠席者及び同意を得られなかった学生は除く)

2. 調査実施

調査日:2017年11月14日2年次開講「保育内容指導法(健康)」

本調査の実施においては、研究の趣旨説明等を行い、インフォームドコンセントで研究への同意を承諾してもらう。調査票は無記名とし、データ結果の集計・分析を行う。なお、本調査は学内研究倫理委員会の審査を経たものである。(研倫審・平29—15号)

3. 質問紙調査「遊びの体験についての調査」の概要

本調査の質問紙は、次の過程を踏まえて作成する。

1) 保護者対象「遊びの体験についての調査」先行研究の検討

(1) B町調査

首都圏周縁部A県B町「子ども・子育て支援ネットワーク調査」(以下B町調査という)の中で、0歳～12歳の子ども(男女)をもつ保護者を対象に遊びに関する調査を行っている。

(2) 調査内容

遊びの種類:ベネッセ教育総合研究所調査『幼児の生活アンケート』(以下ベネッセ調査という)で挙げられた遊び(17項目)と、B町でのグループインタビューでの結果を受けた「虫取り」「川遊び」「森歩き・探検」「家の中で体を使った遊び」「テレビ・DVD鑑賞」「工作・裁縫」の6項目を、加えた遊び計23項目(その他含む)

遊ぶ場所:「自宅(室内)」、「友達の家」「自宅付近の路地や道路」など9項目(その他含む)

遊ぶ相手:「母親」「父親」「きょうだい」「友だち」など9項目(その他含む)

(3) 結果と考察

0～12歳の子どもを対象としたB町調査の結果について、3～6歳(男女)の幼児期に絞って概観する。B町独自項目の「虫取り」(15%)「川遊び」(12%)「森歩き・探検」(11%)は、1割以上で選択され、地域の自然環境によって、幼児期の子どもがその自然の中で素朴な遊びをしていることがわかった。また「家の中で体を使った遊び」(26%)は、屋内を想定した遊びの中で「積木・ブロック」(30%)、「マンガや本を見る」(28%)に次いで第3位の割合であった。住宅

事情として、ほとんどが一戸建ての住まいであるB町では、家の中で体を動かして遊ぶスペースが取れ、そこで体を動かして遊んでいるという姿が表れている。またB町の幼児期の子どもの遊びは、戸外での遊びや室内での遊びなど、している遊びの割合の散らばりがあり、多様に遊びを体験している傾向がある。遊び場所は、自宅の室内及び庭や駐車場の割合が高い。これは、首都圏の幼児を対象としたベネッセ調査とはやや異なる結果であり、その要因は、川や林等、自然環境の残っている地域であること、住まいが一戸建てで自宅内や自宅の庭での遊びができることが挙げられる。

(4) B町調査及びベネッセ調査の検討

幼児期の遊びについて理解するため、ベネッセ調査のように大規模かつ経年の変化を示す調査結果から、どのような現状があるのか、その傾向を知ることが有効である。加えて、その調査対象がどのような属性があるのかを理解した上で、別対象で行われた調査結果についても学修することで、子どもを取り巻く環境と結びつけて理解することになり、多角的な視点を得ることになる。

今回対象とする学生は、首都圏で育った学生だけではない。調査に当たって遊びの種類についての項目は、B町調査の項目に則ることが適切である。

2) 学生対象「遊びの体験についての調査」先行研究の検討

保育者養成校で遊び体験を振り返る先行研究において、遊びを指定してその遊びをしていたかどうかを聞く研究がある(大元2004)。その結果、その他の項目に多くの遊びが含まれたと報告されている。そこで、本研究においては自由記述で遊び名、内容を聞くことにする。ただし、想起する遊びが幼児期以降のものも含まれる可能性もあるので、何歳頃遊んでいたのかを尋ねる。遊び名を自由に記述させる調査(細井ら2007)では、遊びの数だけでは遊びの経験の判断をすることはできないことを示唆している。こうしたことを踏まえ、本研究では遊びの数を多く問うのではなく“楽しかった”遊びを思い出すことを求めることとする。

遊び場所については、例えば「東京」と地名を挙

げても、環境は多様であって遊び場所としての状況を把握することにはならない。そこで、遊びの原風景として挙げている、遊び空間(スペース)の考え^{注2)}(仙田1984)を取り入れ、学生の遊びの体験についての主観的な遊び空間のとらえを問うことにする。尚、この「スペース」について2年次前期保育内容指導法(言葉)で取り上げており、学生にとっては初出ではない。また、ベネッセ調査及びB町調査において実施された遊ぶ場所(9項目からの選択)、遊ぶ相手(9項目からの選択)について、参考として調査に入れることとする。

3) 調査票の作成

(1) 調査内容

過去の調査内容及び先行研究の検討から調査に当たっては、学生自身の遊びの体験の状況とその評価について、大きく2点について回答が得られるようにする。第一に、学生自身の遊びの振り返りである。第二に、子どもの遊びについての考えである。自身の振り返りをした後、幼児期の遊びとして好ましいと思う遊びを挙げ、その理由の記述から、遊びについての学生の考えを明らかにする。

(2) 予備調査

調査票を作成後、予備調査を実施し、おおよそ15分程度で記述できることを確認した。

結果について以下のような仮説を立てる。

- ①自身の遊びを振り返って、「おにごっこ」や「ボール遊び」など集団でルールに則り体を動かす遊びが、楽しかったよかったです遊びの上位となる。
- ②遊び空間として、遊具スペースは多くあったが、アジトスペース、アナーキスペースは少ない。
- ③幼児期に遊ぶといいと思うのは、「おにごっこ」や「ボール遊び」などであり、その遊びを選んだ理由として、「自分が楽しかったから」という自身の体験と直接つながった理由を挙げることが多い。

結果について、記憶された遊びの体験、遊び環境、遊びのどのような内容を楽しさと実感しているのか、またそれを保育実践として位置づけようと考えているのか考察する。

4. 分析方法

前述した仮説を検証するために、エクセルを用いて以下のようなデータ分析を行う。

- 1) 子どもの頃、楽しかった、よく遊んだ遊びについて、遊び23項目に基づき、分類し集計を行う。その上で1位の遊びの傾向を明らかにし、理由で挙げられていることについて集計する。
- 2) 遊び空間を6つのスペース毎に集計し、全体の割合に対する値を比較する。
- 3) 遊ぶ場所、平日の遊ぶ相手について、項目ごとに人数とその割合を集計する。
- 4) 幼児期に推奨する遊びを項目毎に数とその割合を集計する。また、子どもの頃にしてきた1位の遊びと幼児期に最も推奨する遊びを比較し、一致を見る。又、最も推奨する遊びを選んだ理由について、集計を行う。

III 結果

1. 遊びの体験

1) 子どもの頃にしてきた遊び

表1に示すように、学生が「子どもの頃楽しかった、よく遊んだ遊び」として、鬼ごっこ、ケイドロ、氷鬼、ポコペンなどの「おにごっこ（“おに”を決め追うー逃げる遊びを総称する）」、おままごと、家族ごっこなどの「ごっこ遊び」が最も多く、それぞれ13名が挙げた。次が「自転車・一輪車等の遊び」、ドッジボール、あんたがたどこさ等の「ボール遊び」（それぞれ5名）であった。1位の遊びをしていた年齢は、3歳～小学生であり、平均すると5.1歳であった。回答のうち、おままごと等（項目「ごっこ遊び」に分類）や、ねんど（項目「工作」に分類）は、主に室内で行う遊びであったが、他は戸外で行う遊びであった。

「その他」の項目に入れた遊びは、かけっこ、木登り、リレー、秘密基地、水遊び、竹馬、雪遊び、トランポリン、猛獣狩り、フルーツバスケット等である。

楽しかった、よくした遊び1～3位を合計すると、「おにごっこ」（のべ38名）が最も多かった。次いで「ごっこ遊び」（23名）、「どろんこ」（14名）、ブランコや滑り台など「（公園）遊具」（12名）となった。

表1 子どもの頃にしてきた遊び（1～3位）

	遊びの名称	1位	2位	3位	計
1	（公園）遊具	3	8	1	12
2	どろんこ	3	5	6	14
3	ボール	5	1	2	8
4	一輪車等	5	0	2	7
5	おにごっこ	13	14	11	38
6	なわとび等	0	2	2	4
7	自然のもの	2	0	0	2
8	虫取り	1	0	0	1
9	川遊び	1	0	0	1
10	森歩き	0	0	0	0
11	TVゲーム	0	0	0	0
12	携帯ゲーム	0	0	0	0
13	カードゲーム	0	0	1	1
14	お絵かき	0	1	0	1
15	絵本	0	0	0	0
16	積み木等	0	0	0	0
17	パズル	0	0	0	0
18	おもちゃ	0	0	0	0
19	ごっこ遊び	13	7	3	23
20	室内運動遊び	0	0	0	0
21	工作等	1	0	2	3
22	TV鑑賞等	0	0	0	0
23	その他	6	8	3	17

2) 理由

楽しかった、よくしていた遊び1位の「おにごっこ」「ごっこ遊び」では、表2に示すような理由が挙げられている。この理由から、“走る”、“模倣する”等の自分の行為そのものが楽しいこと、友達と関わることが楽しいこと、ものを扱うことが楽しいことといった、主体的に遊ぶ中での楽しさを味わっている姿が表れている。

表2 子どもの頃にしてきた遊びを選んだ理由の例

[おにごっこ]

- ・ 走るのが楽しい。
- ・ けいさつ役で全員をろうやに入れるのも楽しかったし、どろぼう役で逃げ回りながらも仲間を助けに行くのが楽しかった。
- ・ 家の近くの友達と遊ぶことが多く、人数も沢山いて大人気でやっておもしろいと思っていたから。鬼ごっこをするよりもろうやに入れられるのが面白かった。
- ・ 鬼になったときにつかまえたうれしいから。
- ・ 社宅の敷地全体を使って思いきり駆け回ることができたから、ずっと鬼ごっこをしていた記憶がある。
- ・ 追いかけられる楽しさがたまらなかった。
- ・ とても盛り上がった。やってみるとハマる。

〔ごっこ遊び〕

- ・ 幼稚園の教室におままごとがやれるスペースがあり、いつもみんなとやっていた印象が強い。
- ・ ごっこ遊びを覚え、よくやっていた。お母さんにあげられお母さん役をやるのが楽しかった。
- ・ 家族に見たてたり、野菜を切ったりするフリなどでも楽しかったから。
- ・ 違う年齢の子と遊んで世話役がすごく好きで、毎回やっていた覚えがあるから。
- ・ お母さんになりきって、友だちの面倒をみるのが好きだったから。また、エプロンやスカートなどが部屋においてあり、たくさんつけれることができたため。
- ・ 大人数でできて、仲間はずれもないから。
- ・ とにかく毎日していた記憶があり、とてもたのしかった。また、しゃぼん液などを作ってケーキをつくったりもして、おままごとたのしかったから。

注：表2の記述は原文のままである。

2. 遊び環境

1) 遊び空間

図1に示すように、遊び空間の有無を尋ねた結果、遊具スペースと、オープンスペースが「多くあった」と答えた学生が多い。「少しあった」も加えると、自然スペースや道スペースについても、遊び空間として存在していたとらえていたという結果であった。楽しかった遊びの回答にはどこで遊んでいたかの記述を求めなかったが、遊びの内容から「おにごっこ」「遊具」は、多く挙げられており、空間がありそこで遊んだということが分かる。また、泥んこ遊びや水遊び、雪遊びなどが挙がっていて、自然のある遊び空間(自然スペース)があり、遊んでいたことが考えられる。アナーキースペースは「なかった」(44%)「あまりな

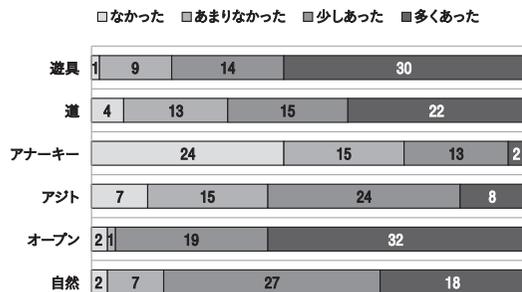


図1 遊び空間(6つのスペース)

かった」(28%)を併せて7割以上であるが、アジャスペースについては「少しあった」(44%)「多くあった」(15%)という回答であった。自分が遊んで楽しかった遊びに「秘密基地」を挙げていた回答もあったので、子どもの頃にアジャスペースがあり、秘密基地のような遊びの体験をしていることが考えられる。

2) 遊ぶ場所と相手

遊ぶ場所では図2に示すように、自宅付近の空き地や公園(全回答者の65%)が最も多く、友達の家(48%)が続く。ベネッセ調査では自宅(室内)が圧倒的に高かったことと比較すると、児童期の記憶が混在していると推察するが、15年前には自宅外が遊ぶ場所になっていた実態があるといえるだろう。

平日に遊ぶ相手は、図3に示すように、友だち(67%)、きょうだい(61%)、母親(52%)の順となった。順位は異なるが、B町調査の結果に似た傾向となった。

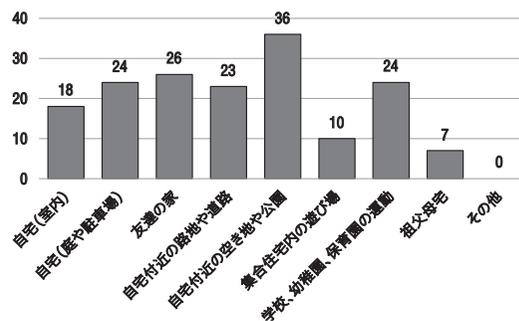


図2 遊ぶ場所

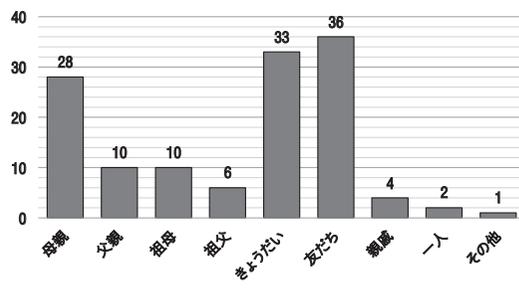


図3 平日の遊び相手(幼稚園、保育所等以外)

3. 幼児期の遊びについての考え

1) 幼児期に推奨する遊び (23項目の選択)

幼稚園や保育所の園児が幼児期に遊ぶかと思う遊び(以下推奨する遊び)を、23項目から選択したのべ数は表3に示す。

全体的に、戸外での遊びをいいと思う傾向がみられる。高い割合で選択されたのは「砂場などでのどろんこ遊び」(87%)、「公園の遊具を使った遊び」(80%)、「おにごっこ、缶けりなどの遊び」(80%)である。子どもの頃に楽しかった、よくしていた遊びでは多くの学生が挙げた「ごっこ遊び」は64%である。自然環境に関連した「石ころや木の枝等自然のものを使った遊び」(47%)「虫取り」(44%)「川遊び」(36%)となっている。

表3 幼児期に推奨する遊び(複数選択)

遊びの名称	人数(%)	遊びの名称	人数(%)
(公園)遊具	44(80%)	カードゲーム	9(16%)
どろんこ	47(87%)	お絵かき	9(16%)
ボール	40(73%)	絵本	12(22%)
一輪車等	32(58%)	積み木等	27(49%)
おにごっこ	44(80%)	パズル	10(18%)
なわとび等	35(64%)	おもちゃ	10(18%)
自然のもの	26(47%)	ごっこ遊び	34(64%)
虫取り	24(44%)	室内運動遊び	17(31%)
川遊び	20(36%)	工作等	12(22%)
森歩き	9(16%)	TV鑑賞等	7(13%)
TVゲーム	3(3%)	その他	0(0%)
携帯ゲーム	2(4%)		

2) 最も推奨する遊び

図4に示すように「おにごっこ」17名(31%)が最も多く、「どろんこ」10名(19%)、「ボール」9名(17%)

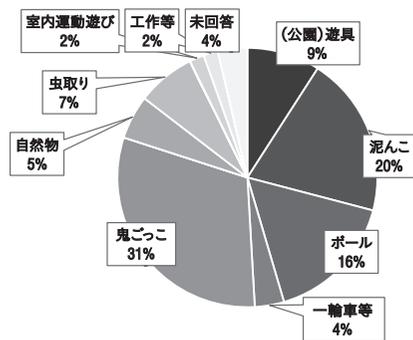


図4 幼児期に最も推奨する遊び

と続いている。「テレビゲーム」「携帯ゲーム」等、誰も選ばなかった遊びが「ごっこ遊び」「その他」を含めて14項目あった。

3) 自身の体験と最も推奨する遊びの比較

表4に示すように、「よく遊んだ自身の体験」と、「最も推奨する遊び」が一致していたのは12人(22%)であった。一致の例は「おにごっこーおにごっこ」「化石ごっこー自然のものを使った遊び」「砂場遊びーどろんこ」等であり、不一致の例は「おままごとーおにごっこ」「おにごっこー遊具」「ブランコーボール遊び」等である。

表4 していた遊び(体験)と最も推奨する遊びの比較

	一致	不一致	未回答	合計
1位と最も	12(22%)	40(73%)	3(5%)	55(100%)

4) 最も推奨する遊びを選んだ理由

幼児期に最も推奨する遊びを選んだ理由を「身体的」「社会的」「環境的」「知的」「情緒的」「その他」の側面から分類し、記述内容を分析した結果は次のとおりである。

(1) 身体的側面

最も多く挙げられたのが、「運動能力が向上する」「体力がつく」「運動神経がよくなる」といった、身体的な能力についての理由である(22名)。さらに「多様な動きができる」「全身を動かせる」「走る」「走り回る」「投げる」等の「行動・動き」が含まれている理由が多く挙げられている。

(2) 社会的側面

次に多く挙げられたのは、人・集団と関わることであり、具体的には「友達との協力」「友達との交流」「大人数で遊べる」等の社会的側面の理由である。中には「チームプレイが得意になる」という回答もある。

(3) 環境的側面

「自然にふれられる」「戸外で遊べる」「水」「砂」「土」「虫」などが理由に挙げられている。

(4) 知的側面

「ルールを考えられる」「感性が豊かになる」「視野

が広がる」「手」「はだし」など感触を味わうことも挙げられている。

(5) 情緒的側面

「自由に遊べる」「自力でできる」「満足感を得られる」といった主体的な喜びを理由に挙げているのは、6名である。「(私自身)とても楽しかった」「自分自身が沢山遊んだ」といった自身の嗜好との一致は3名である。

(6) その他

「小さい時は(やったほうが良い)」「小学生になってからボールを使うことが増える」、「大きくなるとできなくなる」といった、時期や期限について言及している回答もある。また、「ほとんどの人がする」「(重要性を)聞いたことがある」といった周囲の情報から考えた回答もある。

IV 考察

1. 遊びの体験を思い出すこと

実態調査の理解に際し、自分の体験を重ねその体験に価値を見出すことが深い理解のきっかけとなる。楽しかった、よくした遊び1～3位の合計に「おにごっこ」が最も多かった。その理由として、「おにごっこ」には様々な楽しさがあり、協力や競争といった友達との関わりや保護者とのふれあい、多様に体を動かすことが楽しいのである。更に本研究の対象が体育短期大学生で幼いころから体を動かすことが好きな学生が多いことが要因であろう。自分自身の体験を振り返ると、「その動きが楽しかった」「ものを扱うのが楽しかった」「友達と一緒にするのが楽しかった」等、遊びの楽しさ・面白さを思い出し、子どもが楽しんでいる遊びの面白さに着目することに視点をおきやすい。遊びは、保育実践者から指導され受身だったのでなく、主体的に取り組んでいるからこそ、楽しかったのである。ここから、子どもが主体的に繰り返すこと、十分に時間をかけること等、夢中になって遊びこむ姿を支える援助の方向性や、一人一人の実態を良く見て援助しようとする姿勢をつくることに発展させる授業が構想される。楽しかった遊びがどのような価値を含んでいたのかを考え、楽しいことをやろうとする子

どもの気持ちに共感することにつながるのである。保育実践者は「子どもは自分から楽しんで遊んでいるか」「幼児期にふさわしい経験の獲得につながっているか」といった、その時期に何が必要なのかを考えようとする姿勢を確立させることが肝要である。

2. 遊び環境について

「アジトスペース」が「少しあった」(44%)「多くあった」(15%)という結果から、ある程度は自分たちの遊ぶ拠点をもっていた体験をしていることが考えられる。しかし、現代の幼児には「アナーキスペース」だけでなく「アジトスペース」はあるのだろうか。「オープンスペース」「遊具スペース」はあっても、そこで冒険し挑戦するような遊びは“危ないから遊具を撤去する”“危険だから遊ばせない”という傾向が高まっている。また、不審者対策等から、子どもだけで遊ぶことが難しくなっている現状を把握させる必要がある。しかし同時に、子ども自身が主体的にリスクを学ぶ姿を理解する内容を取り入れることが保育環境の安全性について授業で学ぶ際、有効だったと述べている(村石ら2016)ように、遊び環境についての学習を環境の悪化という一面で終わらせずに、一歩進んだ理解を図ることが望ましい。そして、幼児にとって原風景となる、多様な「スペース」の体験ができるような環境設定への学習につなげたい。

幼児期に推奨する遊びの中で、自然環境に関連した「石ころや木の枝等自然のものを使った遊び」「虫取り」「川遊び」等、自然を体験することに学生は価値をもっている。しかし、自身の体験として楽しかった、よくした遊びには自然体験があまり挙がっていなかった。この結果について、次の研究が参考となる。学生を対象に、児童期に夢中になって遊んだ外遊びと自然体験の調査において、ドッジボールや野球等のボールを使った遊びやどろけいやおにごっこが印象に残っており、自然体験は挙げられなかった。しかし体験を尋ねると周囲の環境の中で自然体験を行っていたという(吉野ら2011)。ここから本研究の対象学生においても、自然体験をしていないわけではなく、自身の楽しかった、よくした遊びに雪遊び等の自然体験を挙げないのは、例えば東京で雪が降るとイベン

ト的に雪遊びをするが、半年雪のある地方では、日常的な環境であり、日常的な遊びであったことが原因と推察される。

自然体験と関連した研究では、幼児期に自然体験が豊富だった児童を「運動能力や体力が高く、自然への理解が深い子ども」だと評価している保護者が多い傾向にあったことを報告している研究がある(山本ら2005)。自然の中での体験を重視し、自然環境で遊ぶと意識すると、園内外の自然環境を遊びに活用していくことにつながるだろう。さらに「環境はそれぞれの子どもにとって臨床的で個別的なものとして存在する。したがって、保育における環境の学習は、一人ひとりの子どもが環境とかかわる過程で、その子どもなりに了解すること」(平山2013)であり、遊び環境における「探究心の保障」の重要性を、学生に教える必要がある。

3. 遊びの評価

23項目からの複数選択で、幼児期に推奨する遊びとして、のべ数が最多の遊びは「おにごっこ」であった。更に、最も推奨する遊びとして1つだけ選ぶ遊びも「おにごっこ」が最も多く支持された。これは、おにごっこには「身体的側面」「社会的側面」「知的側面」等多側面の価値を含む遊びだと評価されたためと思われる。そこでこの「おにごっこ」を教材として授業を行うことが、学生たちの意欲的な受講を引き出すことができるのではないかと期待される。「おにごっこ」には、ごく幼い子どもでも保育実践者から「待てえ」といわれると「走る」行動が起きること、直線だけでなく多方向に走ること、追いかけられたり追いかけてたりして相手とふれあうこと、役割をとり交代をすること等多くの要素がある。完成されたおにごっこ遊びを再現するより、これらの要素が徐々に高度になりながら複雑に絡み合っていく、いろいろな「おにごっこ」が楽しめるようになることに気付かせることが必要である。

最も推奨する遊びと、自分が楽しかった、よくした遊び(遊びの体験)の不一致が7割をこえていたのは、自分の好みではなく幼児期にふさわしい遊びに含まれる価値を想定して、導いたからだと考える。そして、最も推奨する遊びとして「おにごっこ」が最多数に選

ばれ、その理由に“運動能力”“体力”等「身体的側面」が理由に多く挙げられていた。教育文化学部の学生を対象に遊びの中の学びを調査した研究(山名2007)では、幼児期の遊びで人間関係や規範意識を学んだという回答が多く、運動は少なかった結果と大きく異なる。このことは本研究の対象が体育短期大学の学生で、元々身体や運動について興味関心や経験があることが要因として考えられる。さらに「保育内容指導法(健康)」受講者であり、この授業では戸外で体を動かす遊びの有益性を学んでいるためそのことが影響していたとも考えられる。近年、幼児期運動指針の策定があり、幼児は遊びを中心に毎日合計60分以上楽しく体を動かすことが大切だと、目安が挙げられている(幼児期運動指針策定委員会2012)。また最近の調査結果では、幼児期に外遊びをよくしていた児童(小学生10歳)は、日常的に運動し、体力も高いことを報告している(スポーツ庁2017)。幼児期に体を動かすことに価値があることは、周知されてきている。ただし、運動能力の研究で一斉保育中心の園より自由な遊びを取り入れている園の方が有意に運動能力が高かったこと(杉原ら2014)等、改めて“遊び”の重要性を学生に示していくことが重要である。遊びは与えられて行うものでなく、何かを育てる手段として行うものではないこと、それ自体が「面白い」のであり、自己拡大を図る衝動としての現象であるという原点を見失わないように留意する必要がある。

こうした内容が、保育内容や発達の理解などを扱う授業の中で取り上げられ、将来的に実践の場に活かされていくよう配慮され、複数の授業で、体を動かす遊びの指導について知識としての学びと演習が往還的なカリキュラムとして配列されるような工夫、科目間の連携が必要である。

V まとめ

現代は最寄りの幼児教育施設への通園が当たり前ではなく、保護者が教育内容を選んで入園を決めたり、待機児童の問題から自宅から遠い施設への入園を余儀なくされるなど、幼児の生活地域の範囲が広がっている。さらに、習い事が日常的に含まれ、幼

児にとっての遊び仲間は単純に近所の子もだけでなくなくなっている。幼児期の遊びは地域によって差があることをふまえ、短絡的に「三間がない」と言わずに、まず実態を理解する必要がある。そのために、実態調査結果を学習し、多角的な視点をもってその実態を踏まえた現代的課題を見出せるようにする必要がある。

本研究の対象学生は、運動が好きで活力があり、積極的に幼児に対して運動遊びを提供しようとする意欲に満ちている傾向がある。運動に対する好感は、良い実践につながる。しかし、幼児期の運動能力は、粗大運動時期であって、成人のそれとは違う。それゆえ期待感が高すぎると“技術指導”や総合的な遊びではないスポーツに陥る危険がある。また、自身の得意なこと、優れた運動能力が、運動について未熟な者に対する寛容さに欠けることがないように配慮したい。幼児期の発達の理解、大まかな道筋を捉えさせるとともに、個人差、年齢差による経験内容の違いがあることを教える必要がある。

そして「教員と学生が意思疎通を図りつつ、一絡ちになって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修(アクティブラーニング)への転換が必要」(中央教育審議会2012)なのである。保育者養成での学修に当たっては、学生自身が体験から問いをもてるような授業が必要である。授業担当者として、学生がどのような体験をしているのか問いかけ、教員の問いを受けて自身の遊びの体験を学生が振り返り、幼児期にふさわしい遊びをつくる環境とはどのようなものか、自分の体験と現代の幼児の体験をどう結びつけるか、次の問いへとつなげていくような過程を描く必要がある。こうしたプロセスを授業に取り入れることが、保育実践者としての力を涵養する学修につながると考える。

注

注1) ベネッセ教育総合研究所調査『幼児の生活アンケート』は、乳幼児の生活の様子・保護者の子育てに対する意識や実態を把握することを目的に、1995年より5年ごとに実施されている。首都圏の0～6歳

就学前の子ども(男女)の保護者3千人規模を対象にしている。

注2) 仙田は、こどものあそび環境を「自然スペース」「オープンスペース」「道スペース」「アナーキースペース」「アジトスペース」「アナーキース」「遊具スペース」の6つの遊び空間に分類し、特定の物理的場所を指すのではなく、こどものあそび行為のイメージを持った実体的空間であるとしている。

引用・参考文献

- 青木久子・河邊貴子(2014) 遊びのフォークロア, 萌文書林, p. 3
- ベネッセ教育総合研究所(2016) 次世代育成研究室, 第5回幼児の生活アンケートレポート, <http://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail.php?id=4949>
- 中央教育審議会(2012)「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて(答申)」, 文部科学省, http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf, pp. 9-26, 2017年9月9日
- 平山許江(2013) 領域研究の現在<環境>, 萌文書林, p. 122
- ホイジンガ著高橋英夫訳(1973) ホモ・ルーデンス 中央公論新社
- 細井香・内海崎貴子・野尻裕子・栗原泰子(2007) 保育者養成課程学生の幼児期の遊び体験について, 川村学園女子大学研究紀要, 第18巻第2号, pp. 121-132
- ジェームズ・ヘックマン著古草秀子訳(2015) 幼児教育の経済学, 東洋経済新聞社
- 窪龍子・井狩芳子・野田耕(2007) 幼児期の生活と遊びに関する研究—幼稚園児の降園後の遊びから「三間がない現象」について—, 実践女子大学人間社会学部紀要, 第三集, pp. 1-18
- 増山均・汐見稔幸・加藤理(2016) ファンタジーとアニメーション—古川足日「子どもと文化」の継承と発展, 童心社
- 文部科学省(2017) 幼稚園教育要領

- 文部科学省(2008) 幼稚園教育要領解説, フレーベル館
- 村石理恵子・土井晶子(2017) 保育者養成校における保育内容「健康」の授業検討: 視聴覚教材から学ぶ安全, 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要, 第52号, pp. 165-171
- 野口隆子(2015) 幼児の教育, 第114巻第4号フレーベル館, pp. 19-22
- 大元千種(2004) 保育学生の幼児期における遊び体験に関する考察, 筑紫女学園大学紀要, 第16号, pp. 249-268
- ロジェ・カイヨワ著多田道太郎・篠塚幹夫訳(1990) 遊びと人間 講談社
- 佐々木直美・井原友里恵・讚井麻理・永富史子(2017) 大学生の心理特性と幼児期の遊び経験との関連について, 山口県立大学学術情報, 第10号 [看護栄養学部紀要 通巻第10号] pp. 11] 17
- 杉原隆・河邊貴子編著(2014) 幼児期における運動発達と運動遊びの指導 ミネルヴァ書房
- 鈴木孝子・橋本淳一・村石理恵子・山村穂高(2015), 社会資源を活用した町型子ども・子育て支援ネットワークのあり方に関する研究, 平成24~26年度科学研究助成事業・基盤研究(C) 課題番号24530773, pp. 28-43
- スポーツ庁(2017) 平成28年度体力・運動調査結果の概要 幼児期の外遊びと小学生の運動習慣・体力との関係, http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/toukei/chousa04/tairyoku/kekka/k_detail/1396900.htm pdf, pp. 15-18 2017年11月23日
- 仙田満(2009) こどもの遊び環境, 鹿島出版会, ((1984) 筑摩書房による出版の再版)
- 寺本潔・大西宏治(2004) 子どもの初航海 遊び空間と探索行動の地理学, 古今書院
- 山名裕子(2007) 大学生が考える「遊びの中の学び」, 秋田大学教養基礎教育研究年報, 23-29, pp. 23-29
- 山本裕之・平野吉直・内田幸一(2005) 幼児期に豊富な自然体験活動をした児童に関する研究, 国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要, 第5号, pp. 69-80
- 吉野美沙樹・古谷勝則・鈴木薫美子(2011) 大学生に聞いた幼児期の外遊び・自然体験とその活動場所, ランドスケープ研究74(5) pp. 591-596